

弥生時代

ひと昔前

現在

田おこし



木製の鋤(すき)や鎌(くわ)で田をおこす。鎌・鋤類は、稲の伝来とともに登場し、種類も豊富。しかし木製では深くは耕せなかったであろう。牛や馬をつかった農耕は、弥生時代にはまだなかったと考えられている。

鉄製の鋤・鋤で田をおこす。その形は弥生時代以来、ほとんど変わっていない。牛や馬に犁(すき)・馬鋤(まぐわ)を引かせて田をおこすやり方も、平安時代の終りごろにはしだいに広がっていった。

広鋤 爪鋤(つめくわ)

田植え



稲作が伝えられた当初から田植えが行われていたかは定かでないが、雑草対策などから、田植えは不可欠であったと考えられている。水田作業の農具として、田下駄や大足がある。



六角田植定規 7 犁 6 馬鋤 5



水田跡 (松江市・夫敷遺跡)

そり (松江市・原の前遺跡出土)

田下駄(たげた) (松江市・西川津遺跡出土)



田打ち車で除草する



六角田植定規 7



馬鋤 5



手で一つひとつ植えていく。

苗の間隔を一定にそろえるため、型枠(田植定規)を転がし、田に線を引き

稲刈り



石包丁を使って、一穂ずつ成熟したのから摘み取っていく。弥生時代の稲作を代表する農具で、古墳時代には見られなくなる。



石包丁(松江市・西川津遺跡出土) 石鎌(松江市・西川津遺跡出土)



鎌で1束ごと、根本より刈り取る。



除草剤をまく



腰を曲げての重労働はなくなった。

田植え機



トラクターに乗っているだけで、田おこし作業は完了。



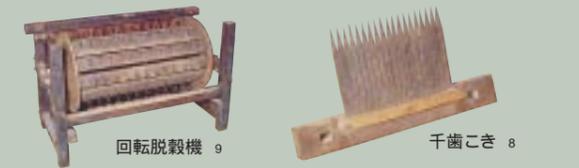
脱穀



臼(うす)と杵(きね)を用いて稲穂を打ち、脱穀と精米を同時に行う。

杵 (松江市・原の前遺跡出土)

千歯こきの歯に稲穂を通し、籾(もみ)をとる。また明治時代以降、歯のついた筒が回転する足踏脱穀機(回転脱穀機)が登場する。



回転脱穀機 9 千歯こき 8



ライスセンター 刈り取った籾はライスセンターに持っていき、乾燥と調整(籾殻を取る)をしてもらえる。



刈り取りから脱穀まで一台ですべてやってくれる。



バインダーで刈る。

コンバイン

たのかといつと、米作りのための農具なんだな。田をおこすための鋤や鎌は、弥生時代は木製だった。それがいつしか鉄製に変わったという具合に。でもその形は今の鋤やスコップとほとんど同じだから、変わったとは言えないかもしれない。

変わったと言えるのは、稲の収穫の方法だ。弥生時代は「石包丁」っていう石の道具で稲を一穂ずつ摘んでいた。能率が悪そうに見えるけど、そのころの稲は成熟するのがバラバラだった。脱穀は臼の中に稲穂を入れて、それを杵でついてやってたから、穂摘みにしたほうが都合がよかったんだ。

その後、稲穂の成熟も一定になってきて今度は鎌を使って稲の根本からまとめて刈るようになった。鎌を使った稲刈りは最近までずっと続いてきたんだけど、脱穀はどうだろう。臼や杵を使ったり、稲穂を木の棒にはさんで引く張ったりしてたけど、江戸時代に「千歯こき」が発明されて、すいぶん楽になったなあ。米の精米や選別にも「唐箕」や「千石でし」などが使われるようになってきた。でもそれらはすべて、手でやってたことに変わりはなかった。田植えなんて、弥生時代からずっと手で植えていたんだぜ。

ところが、作業や農具が機械化されてすべてが変わった。昭和三〇年代ころの話だけど、ぼくから見れば「いつのあいだのこと」か。急速に普及して、それまでの道

やあ、この「おこし」は、ぼくは「おこし」だ。こんな怖い顔をしてるけど、おこしで田んぼの中に立ち続けると、三〇〇年になる。その間、ずっと移りゆく世の中で、「米作り」がどんなふうに変わっていったのか、つぶさに見てきたんだ。だからこの場を借りて、「米作り」といふものをすこし語らせていこう。

上の表を見てもうおぼつかると思うけど、米作りってのはそれが始まった弥生時代から現在まで、基本的な作業は何も変わっていないんだ。縄文時代の終りころ、大陸から稲作が伝わってきたときから、田おこしして、田植えして、稲刈りするって、いつまでも変わらない。

田をおこして稲を育てるの、だいたい一年かかる。その間ずっと付きっきりで、稲の世話をしなくちゃいけない。だから人間たちは、ずっと同じ所で暮らすはめになった。今の日本人の基本的な生活基盤は、弥生時代の米作りから始まったといえるね。

じゃあ、何が三〇〇年の間に変わったのか